

小説・映画「星の子」が描く宗教・家族・学校 —「宗教2世」問題の理解と考察のために—

塚田穂高*

(令和3年9月21日受付；令和3年11月29日受理)

要 旨

本稿は、今村夏子の小説『星の子』(2017年)ならびにその映像化作品である映画「星の子」(2020年)を事例に、宗教・家族・学校に関わる現代的課題、特にいわゆる「宗教2世」問題について検討を加えようというものである。

現代日本社会において、特定の信仰・信念をもつ親・家族とその宗教的集団の元で、その教えの影響を受けて育った子ども世代である、「宗教2世」をめぐる問題が注目を集めてきている。特にマンガや書籍などさまざまなメディアや、SNSを通じて、多くの当事者がその悩み・苦しみ・生きづらさに声を上げ始めているのが特徴的である。

「星の子」は、両親がいわゆる「新宗教」に傾倒する中で、悩みながら育つ少女の様子を描いた作品である。このような作品には同時代の社会問題を考える視点が多分に含まれているのではないかと問題意識から、特に小説版と映画版の差異にも注意しながら、宗教・家族・学校の三者関係を分析・考察した。

その結果、まず同作品はいわゆる「宗教2世」の信仰形成やそこにおける戸惑い、苦悩などをかなり共感的に描いていることが明らかになった。特に、宗教集団と家族外の他者の視点が常にもち込まれることにより、信仰・信念の迷いやわからなさが描かれている点の特徴的である。とりわけ、学校という空間とそこにおける教師のふるまい方が、外からの批判的視点を持ち込んでおり、それは学校現場において、信仰をもった児童・生徒たちにどう向き合うかという問題を示唆している。また、小説と映画の差異に着目すると、設定やせりふを改変することで、自己と他者との軋轢を先鋭化させている局面も観察されることが明らかとなった。

KEY WORDS

小説『星の子』, 映画「星の子」, 「宗教2世」問題, 宗教教育, 家族, 学校と宗教

1 問題の所在—「宗教2世」問題の浮上のなかで—

文芸作品や映像作品に、同時代の社会問題がどのように落とし込まれて、表現されているのだろうか。その作品を通して、われわれはその問題をどのように理解することができるだろうか。本稿は、今村夏子の小説『星の子』(2017年)とその映像化作品である映画「星の子」(2020年)¹⁾を事例に、宗教・家族・学校に関わる現代的課題、特にいわゆる「宗教2世」問題について検討することを目指すものである。

「宗教2世」²⁾——特定の信仰・信念をもつ親・家族とその宗教的集団の元で、その教えの影響を受けて育った子ども世代——をめぐる問題が注目を集めてきている(塚田 2021; 2022; 藤倉 2021ほか)。『ドアの向こうのカルト—9歳から35歳まで過ごしたエホバの証人の記録』(佐藤典雅, 2013年), 『解毒—エホバの証人の洗脳から脱出したある女性の手記—』(坂根真実, 2016年), 『カルト村で生まれました。』(高田かや, 2016年), 『さよなら, カルト村。—思春期から村を出るまで—』(高田かや, 2017年), 『よく宗教勧誘に来る人の家に生まれた子の話』(いしいさや, 2017年), 『カルト宗教信じてました。—「エホバの証人2世」の私が25年間の信仰を捨てた理由—』(たもさん, 2018年), 『カルト宗教やめました。—「エホバの証人2世」の私が信仰を捨てた後の物語—』(たもさん, 2020年), 『宗教2世の過去にけりをつける—エホバの証人の壮絶体験記—』(たぬきち, 2021年)など、マンガや書籍などのメディアを通して、いわゆる「カルト問題」(塚田 2012b)との連結もはかりながら、その体験の苦しさ・生きづらさが書き綴られている。それらは従来の脱会告発的なものとも連続性をもちつつも、明らかに量的・質的な差異がある。SNS上では、多くの当事者がその悩み・苦しみ・生きづらさを吐露するとともに、自助グループや体験の共有などゆるやかな連帯と社会への働きかけが始まっている。2021年には、NHK Eテレ「ハートネットTV “神様の子”と呼ばれて 宗教2世 迷いながら生きる」(2/9), NHK総合「逆転人生 親に束縛された人生 宗教2世 葛藤の物語」(5/10), NHK関西「かんさい熱視線 私たちは“宗教2世” 見過ごされてきた苦悩」(5/28)と、NHKの諸番組にお

*人文・社会教育学系

いて立て続けにこの問題が取り上げられた。この問題が社会問題化するにあたっては、前述の当事者の切実な思いや、SNSの発達と普及、教団の宗教の停滞、社会における家族・親子観の変化などさまざまな要因が複合的に関わっていると考えられるが、いずれにしても大きなうねりとなっていることは言えよう。

こうした動向のなかに、小説と映画「星の子」も位置づけられよう。同作も、両親がいわゆる「新宗教」に傾倒する中で、悩みながら育つ少女の様子を描いた作品である。現代社会において、特定の「宗教」的信仰・信念をもった「家族」に生まれ育つとはどのようなことなのか。その子どもが「学校」や他者との関係をどのように生きるのか。こうした同時代の社会問題としての「宗教2世」問題を考える視点が、この作品には多分に含まれているのではない³⁾。以上のような問題意識から、本稿では同作における宗教・家族・学校の多項的關係を分析・考察する。

2 先行研究の検討、研究課題の設定—「2世信者」研究／小説・映画のなかの「宗教」研究—

本研究はまず、宗教研究のなかの「2世信者」研究（特に日本の「新宗教」を中心とした）の文脈に位置づけることができる。ここにおいては、「信仰をもっていなかった人が、なぜ宗教に入るのか」という入信・回心論が、従来の研究の基本枠組であった（渡辺 1990ほか）。宗教社会学や宗教心理学の基本テーマの一つといってよい。特に、戦後高度経済成長期に新宗教運動が大発展を遂げるなかで、「なぜ新宗教が伸びているのか、それは多くの人が新たに入信するからだ」という社会的かつ学術的関心のもと、多くの研究が蓄積されていった。

そうした問題意識から言えば、「2世信者」（研究の文脈では従来この語を用いてきた）研究は、どちらかといえば派生的なものとして扱われてきた。1990年時点での新宗教研究の集大成とみなされる『新宗教事典』（1990年）には、「二代目以降の信者に関する調査はほとんどないに等しい」としてわずか1頁に記載があるのみであった（渡辺 1990:208）。その後、（谷 1993）（渡辺 2003）（猪瀬 2004）（塚田 2006）などの研究が蓄積され、国内最大級の教団である創価学会の信仰継承の問題を扱った（猪瀬 2011）のようなまとまった研究も提出されるに至った⁴⁾が、それでもその研究は多いとは言えない。同じように新宗教研究の「本筋」からははずれるという理由から、脱会者の研究も後手にまわった。オウム真理教事件を経て2000年代に入り、「カルト問題」研究の進展とともにようやく、（猪瀬 2002）（櫻井・中西 2010）などが提出されてきた。

「2世信者」研究としては、（塚田 2006）の視点を振り返って、本稿での考察においても参照したい。同研究は、ある「霊術系新宗教」の一人の信仰者のライフヒストリーを記述し、幼少期から教団の教えに基いたしつけを受けて育った「2世信者」が、教団外世界観の参照や「教団外他者」との相互行為を経て徐々に教えに窮屈感・束縛感もち葛藤を抱えるようになり、親元を離れることで教団活動からも離脱したが、それでもどこかに教えとのつながりを感じ、さまざまな出来事を受けて教団活動に戻ってきた事例を考察した。ポイントは、教団内や家族内ではなく、「教団外」の「重要な他者」の存在である。つまり、特定の宗教的信念を共有しない他者との出会いや交流、軋轢等を通じて、信仰が動揺させられたり、あるいはかえって強化されたりする局面への着目である。「2世信者」の信仰と実践とは、ただ教団と親に教え込まれるものとしてだけではなく、このようなダイナミズムを含めて捉える必要がある。

次に、文芸作品や映像作品のなかの「宗教」の研究という文脈である。小説など文芸作品における宗教というテーマは、古典的作品の考察をはじめ枚挙に暇がない。しかし、現代宗教と小説をめぐるものは、限定的となってくる。新宗教が小説のなかでどのように描かれてきたかについては、（藤井 1990）で概観されているが、その後の蓄積となると、村上春樹『1Q84』（2009-2010年）についてのいくつかの評論などを除いては十分にフォローされてきていない。本研究は、「2世信者」の問題を扱ったその一つをフォローするものともなるだろう。

映画など映像作品のなかの宗教を読み解く試みも蓄積されてきている。『映画で学ぶ現代宗教』（井上編 2009）は、先駆的なまとまった取り組みだろう⁵⁾。同書では、「その映画から宗教に関するどのようなことが学びとれるか」（同：i）という視点と、「その映画に関わりがある宗教についての知識があると、その映画がどう興味深く鑑賞できるか」（同：ii）という視点から、82タイトルが読み解かれている。この相互参照的な視点は、本稿の分析の基本線としても応用したい。また、井上順孝は、宗教文化教育の教材としての映画という観点から考察を重ねてきており（井上 2014；2015；2020）、「①宗教の始まりを描く映画」「②宗教家（聖職者、修道女、牧師、僧侶など）の苦悩などを描く映画」「③人生観や自然観の中の宗教性を扱った映画」という題材ごとの分類も提出している（同 2020：81-82）。本稿は、広い意味での②に新たな分析の事例を加えることにもなるだろう。

ただし、映画のなかの「宗教」、特に現代宗教や新宗教を読み解く研究手法が確立されているわけではない。本稿では、「宗教」——ここでは新宗教や「カルト問題」等についての学術的知見とそこから析出された諸特徴・特性（塚

田 2012a, b ほか) を念頭に、当該作品が対象や問題の実態をどの程度的確に描写しているか、どの程度デフォルメされたり誇張されたりしているかなどを照らし合わせながら考察・検討するという手法を基本に据えて、分析を試みたい。

その点では特に、「カルト」教団の「2世信者」を扱った映画「カナリア」(2004年)についての筆者自身の考察の試みを振り返っておく意義がある(塚田 2009)。同映画の筋書きは以下である。主人公の少年・岩瀬光一は、母親に連れられて、妹の朝子とともに「カルト」教団〈ニルヴァーナ〉の施設へ出家し、隔離的・閉鎖的な共同生活を通じ教団の教えと実践を叩きこまれる。反抗的な態度を見せた光一は厳しい罰を受けるが、徐々に「信者」らしくなっていく。その後、教団は無差別テロ殺人事件を起こし、崩壊する。母親は特別手配犯となり、行方不明となる。光一と妹は保護され関西の児童相談所に預けられたが、祖父は妹だけを引き取る。施設を抜け出した光一は、同年の少女・新名由希と出会い、妹を取り返しに東京へと向かう。ようやくのことで東京にたどりつくも、そこに祖父と妹の姿はない。途方に暮れて街を彷徨う光一と由希だったが、かつて教団施設で光一の「教育係」だった伊澤ら元信者たちと出会う、というものである(同:34)。

同映画については、「現代社会における家族、宗教、自分らしさとは何かを問うた重厚な作品」(同:34)と評しつつ、「宗教と子どもたち」という視点からは以下のように考察している。そのまま引用する。

…光一の母親や教育係の伊澤ら大人の信者たちは、自分たちで選択・決意し、入信・出家したようだ。だが、光一や妹の朝子は、自分の意志というよりは、親に連れてこられたわけである。光一は幾分大きくなってからだが、このように親が信者であるために、場合によっては幼少期から宗教的なしつけ・教育を受け育った信者を、「二世信者」(二代目信者、信仰二世)と呼んでおこう。彼(女)らは、いわば生まれながらの信者であり、教団の教えを所与のものとして内面化していることが指摘できる。光一も反抗的な態度を見せていた面もあったが、内面化の度合は著しい。たとえば、由希との逃亡中、光一は風呂に入りながらマントラを唱え続ける。万引きを促す由希に、光一は「人の物を盗むと、盗まれた人の苦しみが必ず自分に返ってくる」と言って拒む。犯罪だから・警察に捕まるからではないのである。そして、祖父に対する「俺にはこの人を殺してもいい理由がある」という論理。世俗の倫理とのズレは明らかではないか。[改行] 彼(女)らは疑いを知らずに育っただけに深刻である。映画の後半、脱会した伊澤らはニルヴァーナ時代を総括し、新たな日常を生き始めている。彼らから発せられる「何考えてたんだろなあ。俺たち」、「俺はもうシュローパじゃない。伊澤彰だ」、との「正常な」言葉は、なぜか光一の前では白々しく聞こえる。(同:35)

同じ「2世信者」の問題を扱った映画が、どのように異なってくるのか。その理由は何か。本稿の分析を経て、考えてみたい。

なお、「星の子」を扱った研究は、管見のかぎり見当たらない。ただし、ジャーナリストの藤田庄市が、すでに「宗教二世」物語として、「宗教」としてのリアリティや家族関係などの視点から読み解く試みをしているため(藤田 2021)、その視点も踏まえ、展開させながら考察を進める。

以上より、本稿では、小説・映画「星の子」を対象とし、特に新宗教の「2世信者」研究の視点や知見を援用しながら、その描写の特性を宗教・家族・学校の重なり合いに注意して読み解くことを研究課題として設定する。

3 研究対象の概要—小説・映画「星の子」—

本稿では、今村夏子の小説『星の子』と、その映像化作品である映画「星の子」を対象とする。

今村夏子は1980年生まれの作家である。2010年に「あたらしい娘」で太宰治賞を受賞、2011年に『こちらあみ子』で三島由紀夫賞を受賞、2019年に「むらさきのスカートの女」で第161回芥川賞を受賞している。本作「星の子」は、『小説トリッパー』2017年春季号に載ったものであり、2017年6月には朝日新聞出版より単行本化されている(2019年には朝日文庫から文庫化)。同作は、同年同月20日付で、第157回芥川賞の候補作にもノミネートされた。同年11月10日には、第39回野間文芸新人賞を受賞している。映画版のDVD発売時(2021年3月)の封入チラシによると、同書は「芥川賞作家のもうひとつの代表作」であり、「ロングセラー累計20万部突破」と記載されている。

本稿では、朝日新聞出版版を対象テキストとして扱う。同書はA5版・220頁で、小見出しはないが場面ごとの15の節からなる。同書からの引用は、(小:頁数)と記載する。

あらすじは以下の通りである⁶⁾。主人公は、林ちひろで中学校3年生の少女である。両親と5歳年上の姉のまーちゃんの4人家族だった。未熟児として生まれ病弱だったちひろのために、両親はありとあらゆる薬や民間療法などを試したがよくならなかった。そんなときに父親の会社の同僚の落合さんから「金星のめぐみ」という水の存在を知

らされ、試しに使ったところ、ちひろの症状はみるみる改善していった。それをきっかけに、両親はその「宗教」に傾倒していった。両親は、その水を浸したタオルを頭に掛けて暮らすようになる。ちひろもその影響下で育ち、教団内での集会では、年長世代の海路さんと昇子さんらから指導を受ける。ちひろの暮らす家は引っ越しを繰り返し、そのたびに狭くなっていき、暮らし向きも悪くなっていった。姉のまーちゃんは、ちひろが小学5年生のときに家出し、それっきり会っていない。雄三おじさん（母の弟、映画版では母の兄）一家とも疎遠になっていった。それでもちひろは両親が大好きだった。中学校には、女友だちのなべちゃんと、その彼女が大好きな新村くんなどの友だちもいて、それなりに楽しく平穏な学校生活を送っていた。中学には、同じ教団仲間の春ちゃんもいた。受験生となる中3の春、数学教師の南先生が新しく赴任してきた。ちひろは憧れを抱き、日常に変化が訪れる。数学の授業時には、先生を観察し、似顔絵を何枚も、何枚も、スケッチしていく。受験と卒業が見えてきたころ、決定的な出来事が起きる。最後は、教団の一泊二日の研修旅行の場面。ちひろと両親は星を観る。

あらためて、全節の概要を整理しておこう。

- ① (3-7頁)：ちひろの出生から症状、「金星のめぐみ」との出会い、症状の改善、ちひろの成長
- ② (8-21頁)：ちひろ5歳、「金星のめぐみ」紹介者の落合さん家に行き、両親が実践を始め、傾倒
- ③ (21-32頁)：小2、「雄三おじさんお水入れかえ事件」、姉まーちゃんの彷徨
- ④ (32-43頁)：小学校時代、小4、なべちゃんとの出会い、E・ファーロングとの出会い、「目の病気」
- ⑤ (43-57頁)：小学校時代、同じ教団の同年生の春ちゃん、「教会」内子ども活動の様子
- ⑥ (58-66頁)：小5、姉まーちゃんが出家
- ⑦ (67-76頁)：小5か、紹介者の落合さん息子からの電話、出会い
- ⑧ (77-83頁)：中3、南先生との出会い、あこがれ、似顔絵を描き始める
- ⑨ (83-96頁)：中3、友達なべちゃんとの関係、家族との関係
- ⑩ (96-119頁)：中3、友達なべちゃん、新村くんとの会話、「だまされてるの?」、南先生、両親を「不審者」
- ⑪ (119-125頁)：中3、父・母への抵抗、「ひとりにしてほしいのに」
- ⑫ (125-137頁)：教団仲間、春ちゃんとの会話、南先生との昨日の出来事をめぐる会話
- ⑬ (138-154頁)：法要、親戚との出会い、実家を離れることの提案、「このままでいい」「わたしは大丈夫」
- ⑭ (155-174頁)：釜本さんとの会話、似顔絵との決別、ホームルームでの南先生からの吊るし上げ
- ⑮ (174-220頁)：研修旅行の場面、親子3人、星を観る

このように、小説版は基本的に幼少期からの様子が時系列で描写されていく。前半約三分の一が小学校時代までの来歴、8節以降の約三分の二がおおむね中学校時代の話となり、15節の最後の研修旅行の場面が約50頁でクライマックス的なまとまりがある。以上の過程において、宗教・家族・学校が描かれている。



写真 小説『星の子』(左)と映画版DVD「星の子」(右) [筆者撮影]

次に、映画版である。2020年に公開された。監督・脚本は大森立嗣である。大森は、1970年生まれで、2018年の「日々是好日」では第43回報知映画賞監督賞を受賞している。映画版では、ちひろを芦田愛菜が、母を原田知世が、父を永瀬正敏が、姉を蒔田彩珠が、雄三おじさんを大友康平が、なべちゃんを新音が、南先生を岡田将生が、昇子さんを黒木華が、海路さんを高良健吾が、それぞれ演じている（他省略）。本編110分である。映画版は小説版とは異なり、ほぼ序盤から中学3年時のちひろを基軸に展開し、ところどころで幼少期の様子などが挿入されるかたちを取る。セリフも含め、かなり小説版を忠実に表現しているが、ところどころで重大と思われる変更点があるので、次節で詳しく比較して考察したい。なお、映画版は2021年にはDVD・Blu-ray化された。次節で映画版のセリフ等を描写する際には、DVD版の時・分・秒表記を（D：●.●.●）のかたちで示す（ただし、再生環境により若干の表記のズレも生じうる）。なお、DVD豪華版には16頁のブックレットが付属している。また、映画パンフレット（キネマ旬報社編 2020）は32頁である。これらも資料として併せて参照する。なお、以下の引用部分での下線・傍点・ボールドなどは筆者による強調である。

4 「星の子」における宗教・家族・学校

4. 1 宗教一薄いリアリティ、濃いリアリティー

本項では、本作でちひろとその一家を左右し、覆う、「宗教」の性格を検討する。

まずは、なんといっても「水」である。出生後、ひどい湿疹などに悩まされたちひろと家族は、その問題状況において、職場の同僚を介して（新）「宗教」に出会う。「それは水が悪いのです」「この水で毎朝毎晩お嬢さんの体を清めてあげなさい」（小：4）と問題状況の読み解きと解決の方途を示された一家は、その「呪術的实践」により、「現世利益」を得て、その体験談が奇跡の体験談として会報誌に載る（小：7）。このあたりは、典型的な新宗教との出会いと入信の過程とみてもよいだろう⁷⁾。その水「金星のめぐみ」は、「とにかくなんにでも効く」（小：6）と万能性がうたわれ、

…特別な生命力を宿した水ですからね（小：12）

…身体のなかで宇宙が一番近い部位であり、また全身の神経が集まる場所でもある頭頂から直接働きかけることにより、血液中のリンパ球がより一層刺激される（小：13）

…特別な儀式で清められたお水（小：27）

…水をしみこませたタオルをね、頭の上に乗せると、悪い気から守られるの（小：172）

などと、その根拠と正当性がそれらしく説明される。

確かに新宗教のなかには「聖なる水」をその教えと実践の体系のなかで重要視し、信者・会員に「下賜」・頒布するケースも広く存在している（渡辺・井桁 1989a, b）。あるいは、この水の存在をたとえば「手かざし」儀礼に置き換えてみれば、「救済の方途」としてそれとほぼ同等の役割と位置をもつような描き方には納得がいく。

他方で、違和感もある。まずは、その著しいビジネス性・商品性である。「金星のめぐみ」は、「コンビニの水よりは高いけど、うちは会員価格でまとめ買いしてる」（小：105）という。お布施や献金、奉納金に対して、「いただく」ものではない、明確に商品購入なのである。同時に、「教会」には「カタログ」があり、野菜・菓子・調味料・サプリメント・衣料品・家具など、「宇宙の力を宿した数々の商品」「生活に必要なすべてのものがあります」（D：4.40）ともいう（「祭壇」も「購入」する）。むしろ、カタログビジネスやネットワークビジネスと区別できないような描き方が当然のようになされている。

同時に、この教団の信仰実践はどうやらこの「水」にほとんど終始するようであり、それ以外の「新宗教」らしさ、「近代組織宗教」性はかなり稀薄である。この教団（小説では「教会」と表記、教団名は登場せず、映画版サイト・ブックレットには「ひかりの星」と記載あり）は、いったいどのような組織なのか。小説・映画双方からの断片的な記述・描写からは、毎月第一・第三日曜に開かれる集会、年に一度の研修旅行、集会所、支部（長）、祈祷師、少年部、大規模研修施設「星々の郷」（本堂・中央講堂・記念塔・三角堂などの施設から構成）などは存在するようなのだが、活動実態はよくわからない。どうやら「会長」（小：202）もいるようだが、新宗教の教祖・教主的人物の存在感・意義と比べると軽すぎる。

教え・思想の面でもリアリティが薄い。「神」「仏」などは出てこないようだ。映画オリジナルの会歌の歌詞には、「大いなる宇宙から 光の恵み降り注ぐ とこしえにうち満ちる…」（D：1.26.25）などとあり、他にも「あい」「ほうし」「意思」「メッセージ」「気づく」「祈祷」「オーラ」「前世」「宇宙」「生命力」「清め」などの単語は飛び交うが、なかなか全体的な像を結びはしない。『ほしの子』は（子ども向け）経典だろうか。内容は不明である。「水」

以外にも、「滝に打たれたり」「断食」「お祈り」もあるようだが、ストーリー上から伝わるかぎりのウェイトは軽い。新宗教に共通してみられる「心なおし」（自己反省）の倫理的実践や、究極的な目標など（塚田 2012a）もあるのかどうか判然としない。そうすると、映画版のラスト近くのシーンで加えられた、昇子さんの「ちーちゃん、迷ってるのね」「あなたがここにいるのは自分の意思とは関係ないのよ」（D：1.33.58）の一言も、意味がわかりにくい。

その点では、従来型の新宗教のある程度の組織性や体系性をそなえた性格というよりは、ゆるやかなスピリチュアル・グループやネットワーク、セミナー団体（終盤の「研修旅行」の内容もそれを彷彿とさせる）に近いような、あるいはそれらのもつ世界観や用語をパッチワークしたような性格をそなえるものとして描かれたと捉えるほかない。作者らにとっての現代日本社会における「(新)宗教」とは、そもそもそのようにイメージされるものなのかもしれない。裏を返せば、そうした宗教団体のディテールよりは、ちひろ一家という「家族」と、そしてそこで最重要視される「水」をめぐる実践に描写が特化しているということである。これは、（もちろん教団の組織性や、個々の家族の性格にも左右されるが）「宗教2世」とその問題におけるかなりの部分が、家族・親子関係をめぐって表出する実態とも対応しているとみることができよう。

次に、組織の問題性やトラブル性の示唆についてである。本作での教団は、「あやしい宗教」などと各所で形容されているが、大森監督は「両親のカルト宗教」（キネマ旬報社編 2020：16）とも言っている。大規模研修施設「星々の郷」の三角堂は閉鎖されているが、それは「二十年以上前にあの場所で集団リンチがおこなわれたことが閉鎖の原因だときいたことがあったけど、ほんとかどうかはわからない」（小：210）のだという。映画版では、信仰はなさそうで祖母からお金をもらって代わりに研修旅行に来たという「ツダさん」が「なあ、ここ、ヤバいんじゃないの？いや、ネットにここでリンチにあってそのあと行方不明になった人がいるって」（D：1.27.52）と言っている。また、教団の幹部、海路さんと昇子さんは、「加害」を訴えられている。

…海路さんにだまされた被害を訴えている女の人がいる、といううわさをこれまでに何度か耳にしたことがあるくらいだ。もちろん、どれもたちの悪いうわさ話だ（小：107）

…被害届までだした

…海路さんと昇子さんに監禁されたっていってるんだって

…海路さんのマンションに呼びだされて、閉じこめられて、そこで昇子さんに催眠術かけられて、わけわかんないうちに一番高い水晶の購買契約書にサインさせられたっていつてきてるの（小：128-129）

いわゆる「霊感商法」「カルト問題」の被害と同型であり、実際にあった種々の事件や団体をも想起させる。暴力性や問題性をほのめかず記述である。もっともこれらは、教団内では「海路さんも昇子さんも被害者じゃん」「訴えてきた女の側がおかしいってみんないってるよ」（小：180）と、あくまで「何が本当であると信じるか」という信仰が試される素材として受け取られるものとして提示されている。

続いて、「宗教」の側面において、映画版で大きく変更が加えられたと考えられる3点について示す。

1点目は、ちひろ一家を教団に導いた落合家の、息子ひろゆきがほとんど描かれなくなった点である。小説版では⑦節において、小学校時代のちひろを脅迫的に呼び出し、「おれとおまえ、将来結婚するんだよ」（小：74）と述べ、無理やりキスを迫ろうとする存在である。ちひろ一家にとって落合は、単なる恩人のレベルを超え、教えへの「導きの親」（新宗教では「信仰の親」「霊の親」「経（すじ）親」などと呼ばれ、重要視される）であり、また両親が日常的に出入りしていることから、支部長・集会所代表者・地区長的な、近辺での権力者的な存在と思われる。よって、その息子もその威光を悪用して、ちひろや他の女子に迫っていた。そういったヒエラルキーがにおわされる部分だった。また小説版では、ちひろが両親に反抗した際にはじめて、しゃべれなくなったというひろゆきの心情に共感したという描写があり（小：124）、これは「宗教2世」として生まれ育ったことの苦悩への理解・共感を敷衍するようなシーンだったはずだ。これらは、組織内の位置と家庭状況において悩みの状況が異なる可能性があるという「宗教2世」の多様性を示す内容ともなりうるものであったが、映画版では省かれている。

2点目は、コーヒー禁止というタブー描写の追加である。これも小説版にはなかったが、映画版では雄三おじさんが訪ねてきた際に、「ああ、コーヒーないかなあ？ あっそうか、ダメなんだよな」（D：33.49）と描かれている。このタブーについては、家出から一時的に帰ってきた姉まーちゃんが夜中にこっそりコーヒーをちひろに入れてあげる場面や、父による「コーヒーはパワー弱めるからなあ」（D：40.50）という宗教的ロジックの説明の部分が受けている。コーヒー禁止というタブーの追加は、「こちら側」と「あちら側」の溝をよりはっきりとさせる効果を増すことを狙っているかのようである。そして、法要時にちひろと久しぶりに会話した雄三おじさんが、「おっ！ コーヒー飲むんだ？」「そっかそっか」（D：1.07.10）とうれしそうにする場面につながる。雄三おじさんは、禁止されているはずのコーヒーを飲むちひろに、もしかしたらそれほど信仰に熱心ではないのかもと「希望」をもったのだろう（ただし、直後に絶たれる）。確かに、諸宗教には食を含むさまざまなタブーがあり、その遵守は彼此の境界を分け

る機能をもつ。タブーを共有しない「他者」との出会いは、自らの信仰を自覚し向き合う機会ともなり、「宗教2世」としての生きづらさや悩みにつながることも少なくない。しかし本作においては、他にも各種のタブーがあって、ちひろがそれを遵守しているのか、そしてそれがちひろの悩みにつながっているのかまではあまり描かれていない。ちひろにとっての「壁」や悩みはそこだったのだろうか。

3点目は、同教団の仲間である春ちゃんの彼氏・戸倉くんの「宣誓」シーンの省略である。信者・会員ではない戸倉くんは、終盤の研修旅行に春ちゃんについてきて参加する。小説版では、くじで当たった20人が壇上で信仰などについて「宣誓」する行事に、戸倉くんが当たる。戸倉くんは、

…ぼくは、ぼく戸倉りゅういち、ぼくの好きな人が信じてるものが一体なんなのか知りたくて、今日ここにきました

…ぼくは、ぼくの好きな人が信じるものを、一緒に信じたいです。……それがどんなものなのかまだ全然わからないけど、ここにすればわかるっていうんなら、おれ来年もここにきます。わかるまでおれはここにきま、えー、くることを、おれはおれの好きな人に、約束します (小：199)

と宣誓する。映画版では、この行事のシーン自体はあるのに、なぜか戸倉くんは登壇しない。このシーンは、信仰をもたない者(教団外他者)が、信仰をもつ親しい者をなんとか理解しようと模索する「回路」の可能性の幅を示しているものだったはずだ。映画版ではそれがなく、教団内世界はかなり閉ざされているようだ。

以上で見てきたように、本作における「宗教」の描き方を概観すると、そこにはリアリティの濃淡が認められた。全体的には、スピリチュアル・グループやセミナー団体に近いような、「個人参加型」(島藺 2001)の新宗教教団に近似の描き方がなされていた。この点は、次項で論じる「家族」にウェイトが置かれているためでもあろう。映画版での変更点は、いずれも教団内と教団外の溝や距離を鮮明にし、信仰者ないし「宗教2世」の多様なあり方の可能性をカットして構成をシンプルにするようなかたちではたらいっていることが指摘できるだろう。

4. 2 家族—濃い親子関係、薄い家族・親族関係—

本項では、本作においてちひろが多くの時間を過ごす「家族」について、前項の「宗教」との関係も考慮に入れて、その描き方の特性を分析する。主には、ちひろと両親との関係に対する、雄三おじさん一家との関係、ならびに姉まーちゃんとの関係という視点に集約され、後二者が相互にも関連している。

前項でみたような、一家そろっての特殊な信仰は、それを共有しない親族との関係を疎遠にさせた。

…前回遊びにきたのは大昔だからな。お姉ちゃんのまさみちゃんが小学校に上がったばかりで、ちひろはまだ赤ちゃんだった (小：149)

おじ・おば・いとこの家と十数年にもわたって往来がなかった。「宗教」のせい、であったのだろう。具体的には、「おばあちゃんの葬式で、父と母がお坊さんが唱えているお経とは似ても似つかないお祈りのことばを、けっこうな大声で唱えはじめて、すぐに退場させられた」(小：93)といった行動上の奇矯さ・隔絶性や、「(雄三おじさんに)小学校と中学校の修学旅行の費用をだしてもらった」(小：145)といった経済的な困窮などが要因としてあったことが推察される。

③節、ちひろ小2時の、「金星のめぐみ」を水道水に全部入れ替えていた「雄三おじさんお水入れかえ事件」は大きな出来事である。これは、姉まーちゃんの手引きで雄三おじさんが二ヶ月にわたり行っていたものだ。なお、映画ブックレット・サイトには「ちひろの両親の洗脳を解こうと、ある作戦を企てる」ともある。

…あんたら、二カ月も公園の水道水飲んで喜んでたんだよ。わかったら姉さん。これで目が覚めた。もういいかげん (小：27-28)

しかし、この画策に対してちひろの両親は半狂乱となるばかりで、結局はかえって信仰を強めることとなった。「インチキ」ないし「プラシーボ効果」であることを明確に示したとしても、「信念」が変わるとはかぎらないということをよく示している。

さらには、手引きをしたはずの姉まーちゃんですら包丁(映画版ではハサミ)を雄三おじさんに突きつけて、「帰ってーっ」と迫った。姉まーちゃんの思いはどうだったのだろうか。自分は信じていないし、でたらめだと思っ

ていても、信じている両親の思いと家族の平穏さは壊されたくなかった、という反応だったろうか。ちひろと姉まーちゃんの間には、特別な結びつきが看取できる。しかし、姉まーちゃんにとっては、「お父さんとお母さんがあんなしたのはちーちゃんのせいだ」「ちーちゃんが病気ばかりしてるから」(小：58)なのだという。姉まーちゃんも、環境的には「宗教2世」と言ってもよいはずである。ところが、ちひろはほとんど生まれながらの「宗教2世」であるが、姉まーちゃんにとっては多少は物心がついてから、両親がみるみるはまっていった「宗教」であったのかもしれない。わずかな歳差かもしれないが、「宗教2世」のライフコースのどのタイミングで家族の

「入信」というライフイベントが横切るのかによって、状況が変わりうることを示唆しているだろう。特別なはずの姉妹・家族の結びつきと、その場にもういたくないと感じられるような家族という場。教えを受け入れられない、考えを共有できないということは、その家族からの離脱・遁走の道を選択しなければならないものだったのだろうか。幼少期にちひろと両親の3人で撮った体験談用の写真と、ラストシーンの三人だけの場面とは、つながっている。その間に、姉まーちゃんの入る隙間はないように描かれる。

新宗教は、「貧・病・争」（経済問題・健康問題・人間関係をめぐる問題）などの問題状況に悩む人々が、入信を経て各種の実践をすることでそれらの問題状況を解決・改善、「現世利益」を得て、活動的な信者となり、続けていくものとしてしばしば説明されてきた。また、布教・伝道の対象が、友人・知人関係や、親戚関係をたどって広がることも一般的である。ところが、ちひろの家族の場合は、確かに幼少期のちひろの健康問題が解決されたというスタート地点はあったかもしれないが、家族内や親戚間での不和は増幅し、経済状況は悪化、「御利益」を得られているようには見られず（主観的にはわからないが）、孤立する一家の様子が描かれており、やや距離がある。

一方で、ちひろと両親による家族の密度は、親類縁者が去り、姉まーちゃんが去り、暮らし向きが落ち込むとともに、いっそう強まるかのようだ。

…過去四回引っ越しをし、そのたびに我が家はどんどんせまくなっていった（小：88）

…（両親は）バザーで手に入れたおそろいの緑色のジャージを着て電車に乗り、落合さんの家についてきた（小：92）

…知らない人から見ればあやしい中年夫婦に見えるのではないだろうか（小：92）

二部屋しかなく、暗い家に、家族3人がつつましく暮らす。不釣り合いに大きい教団の「祭壇」が、家族の日常生活に入り込み、覆いつくす「宗教」を象徴する。「知らない人から見れば」、「あやしい」ことをちひろはわかっている。それでも、両親なのである。その信頼は、後述する南先生に「あやしい」両親を目撃され、当たり前にしてきた頭にタオル・水を乗せるのを「ちょっと、今やめて」（小：122）と拒絶するまで自明のものとして続く。いや、それでもなお、続くのである。

ちひろに別の選択肢はなかったのだろうか、そしてこれからもないのだろうか。迫られる場面がある。

法要で久しぶりにあった雄三おじさん一家からは、高校はおじさん宅から通うことを提案される。大学生（映画版では高校3年生）のいとこの「しんちゃん」（映画では「けんちゃん（健吾）」）は、「……あのね、ちひろ。ちひろはおじさんとおばさんから少し距離を置いたらどうかになって、おれたちずっと考えてたんだ」（小：152）と必死で、善意で、環境を変えることを訴える。しかし、ちひろは、

…わたし……、わたしは、……このままでいい（小：151）（今のままでいい（D：1.09.28））

…おじさん、おばさん、しんちゃん、心配してくれてありがとう。迷惑かけてるんだとしたらごめんなさい。でもわたしは大丈夫（小：153）

…心配なんかしないで。健ちゃん、私、大丈夫だよ。誰にも迷惑かけないし。お金も自分でなんとかできると思う（D：1.10.35）

と決然と断る。どこまでも、交わることはないようだ。現状維持、これは中学3年生のちひろによる、「主体的」な選択だったのだろうか。

さて、ラストシーンである。ちひろと両親がいつまでもいつまでも星空を見上げ、流れ星を探すシーンは印象的である。しかし、結局最後まで三人一緒には見るができない。父の「まだ見えないな」（D：1.45.21）というラストのセリフは、なべちゃんから「信じてるの？」と問われ、「わからない」「まだわからないんだ」と答えた（次項参照）ちひろのセリフとも響き合っていて示唆深い。いつかは、一緒に見えるのだろうか。そして、その日まで、あるいはそれからもずっと一緒に見続けるのだろうか。この三人のショットは、これからの三人のあり方を何も確かなものとしては保証していない。

最後に、映画版ではこの三人のシーンにおいて、父が「まーちゃんな、子ども生まれたって」（D：1.41.41）と連絡を受けたことを告げる、というエピソードがオリジナルに追加されている。新たな家族のつながりや変化をも示唆するものである。主演の芦田愛菜はこのシーンを「ちひろがそれまで罪悪感を抱いていた身近な人が、自分の知らないところで幸せになっていたことがわかり、肩の荷が下りる部分もあるんです」「きつとあそこでちひろは吹っ切れたんじゃないかな」（『ダ・ヴィンチ』2020年11月号：169）と解釈している。このラストシーンは確かに印象的であるし、「希望」を感じたなどと前向きに受け止められる傾向も強い。DVD版のカバーもこの3者のシーンである。しかしやはり、特定の信仰・実践をもつ家族の「破壊」「離散」の先で、「このままでいい」3者が身を寄せ合っている様子でもあることには注意が必要であろう。ちひろによる姉まーちゃんの「幸せ」の確信が確かなものともまた言えないのである⁸⁾。

このように、本作におけるちひろの「家族」関係とは、親戚から疎外され、家族（姉）の離脱を経て、そして何より「宗教」が中心に据えられることにより成立され、維持されているものであることが明らかとなった。ちひろと姉まーちゃんとのちがいは、「宗教2世」の多様なあり方が示唆されるものであり、ちひろの場合は中学生ということもありさまざまな葛藤や悩みを抱えつつも、「まだわからない」「このまま」で「宗教」と「家族」とが強く維持されているケースなのだと言えよう。

4. 3 学校—友だちのフラットさ、教師の苛烈さ—

続いて、本作において、主人公のちひろが「家族」と同様にかなり多くの時間を過ごす「学校」という空間での振る舞いや人間関係、周囲からの対応に注目し、考察を行う。特に、友人関係と、児童・生徒—教員関係の2点に着目する。

特定の宗教・信仰をもつ子どもというと、そのことで信仰をもたない多くのクラスメイト等から敬遠されたり、いじめられたり、いじめられたりといったことを想像しがちだが、本作にはその要素は稀薄であるといえる。確かに、小学校時代に友達を「教会」のイベントなどに誘って（おきながら、あまり世話をしなかったため）敬遠されたという記述はあるが（小：32-33）、それのみである。両親が「教会」で入手してかけることとなったメガネへの同級生の反応のくだりもあるが、それは不格好な様子に対する反応で一時的なものだったようだ。このことは、前述の「宗教」のところでも検討したように、コーヒーを飲めない（映画版のみ）とか、水道水は避けて（小：63）特定のペットボトルの水を飲むようにするといったこと以外では、日常的にたいしたタブー・禁止事項や規制がない（描かれない）こととも関係している可能性が高い。たとえば、学校現場で実際に特定の信仰をもった子どもたちが示す、格闘技・武道禁止、宗教曲や讃美するような曲が歌えない、国旗掲揚・国歌斉唱忌避、進学制限、恋愛禁止、他宗教（神道・仏教）施設訪問や礼拝対象物（お守り・お札含む）忌避などに相当するような様子は見られないのである（塚田 2020）。

中学校でも、なべちゃんを中心に友人関係はそこそこ円滑で、いじりやいじめも見られないようである⁹⁾。これも可視化されている差異の部分は、少し変わったペットボトルの水くらいであるので、妥当な反応なのかもしれない（もっともこの水も、水筒等に移したり、カバーを付けければそもそも気にならないような「差異」ではないかと思う）。

なべちゃんとの関係には、不思議な距離感がある。ちひろに関心をもった知り合いの男友達にも、「この子あやしい宗教に入ってるよっていったら、向こうも、じゃあやめとこうだってさ」（小：86）、「怪しい宗教入ってるし、家がどんどん貧乏になってくよって言ったの」（D：16.25）などと「時々わざと意地悪なことをいう」（小：86）が、それ以上は突き詰めるようなことはないし、ちひろもそんな扱いをそこまで気にしていないようだ。

むしろ、なべちゃんの言動は、ちひろが思いつきもしない視点を「他者」としてもたらし、ちひろの「信仰」を問い直すはたらきをする。二つのシーンが象徴的である。

「金星のめぐみ」を一口分けてもらって飲んだなべちゃんは「まずい」と言う。むきになってその正当性を唱えるちひろに、なべちゃんは徹底的な疑いの声をかける。

…じゃあその、かいろさんっていう人がだまされてるんじゃない？（小：106）

…しょうこさんって人もだまされてたりして（小：106）

…でね、そのにせもの学者も誰かにだまされてるの（小：107）

…でね、その学者をだました誰かも、やっぱり別の誰かにだまされてて、その別の誰かもそのまた別の誰かに（小：107）

ふざけているようでもあり、同時に「そんなに確かなものなんてあるの？」「そんなに簡単に誰かが誰かを信じられたりするの？」とラディカルな問いを投げかけているようでもある。最後に、なべちゃんはこう問い、ちひろはそれに対し躊躇なく答える。

[なべちゃん]「……ねえ」「あんたはどう？」「だまされてるの？」

[ちひろ]「わたし？ だまされてないよ」（小：107-108）

しばしの沈黙が二人を覆う。なべちゃんは、特に何も気にしていないようだ。

ところが、それより後の場面——後述する南先生に吊るし上げられた直後の場面における、なべちゃんに「タオルを頭に乗せていると守られると信じているのか」と問いかけられたちひろの対応には、変化がある。

[なべちゃん]「あんたも？」「信じてるの？」

[ちひろ]「わからない」「わからないけど、お父さんもお母さんも全然風邪ひかないの。わたしもたまにやってみるんだけど、まだわからないんだ」（小：173）

なべちゃんは、ちひろの両親の「あやしい」ふるまいを実際に見ても、「知ってるよ」「だって有名じゃん」(小：171)とフラットに接し、動じることはない。そこは「友達」として基本的に変わらない。「宗教2世」にとって、「教団外他者」としての同級生・友達のふるまいが、それでも「ふつう」であること、分け隔てないものであることが「救い」となる可能性を示唆するものである。しかし、その存在と言動は、「宗教2世」とその「信仰」にとっては常に呼びかけ、問いかけるものなのである。

こうした友人関係ときわめて対照的に描かれ、かつちひろに決定的影響を与えているのが、南先生に代表される教師の対応である。南先生はちひろにとっては憧れの存在であった。しかし、それはあくまで観察する対象として、スケッチの対象としてであり、一対一の人間関係としては全くすれちがう存在であった。その隔絶性が決定的となるのは、主に2つのシーンにおいてである。

一つは、ちひろとなべちゃんと新村くんが南先生に車で送られていった際に、公園で宗教実践を行う両親の姿を目撃したシーンである。ちひろの両親だとはまさか思わない南先生は、「あそこに変なのがいる」(小：117)、「二匹いるな」「最近増えてんだよ、季節はずれの不審者が……」(小：118)と、ちひろの前で述べる。目の前の光景は、このようなものだった。

…父が、母の持っていたペットボトルを受け取って、水を母の頭の上にかけてやった。いつもと同じやりかただった。母の頭の上のタオルが乾いていないかたしかめるときの父の手つき、ペットボトルのキャップを開ける指の動き、母の、父に向かってわずかに下げる頭の角度、ボトルの口からチョロチョロと流れでる水の細さ。わたしには、そのすべてが見慣れた光景だった。[改行] それなのに、はじめて見たと思った。(小：118-119)

それは、ちひろにとっては「見慣れた光景」だったはずなのに、「はじめて見た」ようだった。他者の客観的な視点が急に持ち込まれたのである。しかし、それでもちひろは、両親側である「向こう側」に位置する存在である。

このシーンの隔絶性は、映画版では残酷なまでに拡大・先鋭化されている。この様子を見た南先生は、小説版ではなかった「何やってんだ？完全に狂ってるな」(D：55.23)の一言を加えている。それは、「他者」から見れば、「そう」だったのかもしれない。しかし、教師である南先生は、その光景が隣にいる生徒であるちひろとつながりがあるものだと、その想像の片端にも入っていないのである。

このシーンは、翌朝のちひろと南先生の邂逅シーンにもつながる。ちひろは、言い淀みながら、また遮られながらも、「昨日、公園にいたのわたしの親です……」(小：136)と告げる。南先生の受け止めの様子は、「氷細工みたいだった南先生の目の奥に、ぼっと明かりがともった気がした。表情は変わらなかったけど、先生目と顔がみるみる赤くなっていった」(小：137)と描写される。映画版では、戸惑ったような、苦笑したような表情を見せる。ちひろは「……う、うそです」(小：137)と述べ、このシーンは絶たれる。その時の南先生の心情はどのようなものだったろうか。作者の今村自身は、「先生がちょっと傷つくというか恥をかくことを表したかったんです。恥が怒りに変わる瞬間というか」(小川・今村 2019：239)と述べる。それだけではなく、後述する「怪しい水」の件、授業中の似顔絵描きの件などをつなげ、「ああ、やはり」「お前はそちら側だ」と思ったのだろうか。南先生の態度は、ここで固められたのではないだろうか。

そうして、「学校」の場面としてはクライマックスと言える、もう一つのシーンに向かう。ホームルーム中に似顔絵を描いていたちひろが、クラス全員の前で、南先生に名指しで激昂される場面である。「もう限界だ」という南先生は、

…あのな。いいか？ 迷惑なんだよ。その紙とえんぴつ。まずその紙とえんぴつをしまえ。それからその水。机の上のその変な水もしまえ。(小：168)

…いいな、学校は学びにくるところだ。ラクガキしにくるところでも宗教の勧誘をするところでもない。わかったな。これ以上仲間を巻き込むなよ」(小：169)

乳児期のちひろを救った、家族にとって大切な「金星のめぐみ」は、南先生にとっては「変な水」である。ちひろが学校で「勧誘」をしていたとは思えないが、それでもそのちひろを念頭に置き「宗教の勧誘」をするな、「仲間を巻き込むな」と言い放つ。これは「正論」だろうか。さまざまな背景をもつ子どもたちを前にした教師の取る態度・言動としては、どうであろうか。なお、このシーンは、やはり映画版では拡張・先鋭化されている。

…いいか、学校は学びに来る所だ。落書きする所でも宗教の勧誘に来る所でもない。大体、水で風邪ひかないなら誰も苦労しないんだよ。両親にも言っとけ。」(D：1.18.17)

このようなセリフが足されている。「科学的」「常識的」に、生徒の信念を否定するとともに、その批判の矛先は生徒の家庭・両親にまで向けられている。なぜ、南先生は「水で風邪ひかない」話を知っているのか。伏線として、映画版のみに登場する保健室の麻美先生とちひろの会話シーンがある。ちひろは、「私、風邪ひかないんです」「この水

飲むと風邪ひかないんです」「でもやっぱり風邪ですか？」(D:1.04.55)と問う。麻美先生は「風邪でしょ」と冷たく答える。描かれている部分のみから推測すると、この会話内容あるいは同等の内容が、南先生にも共有されているとしか考えられない。特定の信仰をもった児童・生徒の、注意すべき言動を教員間で共有する、その行為自体は妥当だとしても、それによって引き出されたのが、ホームルームでの南先生の言動だとしたら、それはどうだろうか。ちひろ—南先生のあいだの隔絶性の例は、子ども—教員間の関係性のあり方、その「まずい」あり方を問いかけているようである。

このことは、「宗教2世」の生きづらさや悩みは、学校現場を筆頭に、またそれに限られずに、人間関係・友人関係など、社会のなかの教団外他者(大人・同世代等ともに)のふるまいによってかなり軽減・改善されるような面があるのではないかということを示している。もちろん、当該教団やそれを信奉する家族の元に留まり続けることだけが「正解」だと前提することはできない。深刻な虐待的行為や人権侵害的行為については、介入や解決が模索されるべきだ。しかし、「特定の信念をもつ家族に生まれ育った」ことが理由となって、いじめや生きづらさにつながるのであれば、その部分の解決・解消には学校現場も含む当事者以外の社会の側が取り組まなければならないはずである。本作は、その方向性を示唆している。

5 小括—考察と今後の課題—

以上の議論において、小説・映画「星の子」で描かれた宗教・家族・学校の全体像と特徴を明らかにしてきた。多様な論点を挙げるとともに、不十分点や実態にはそぐわない点などについても批判的に論及してきたが、小説・映画ともに作品自体を貶める意図はない。文芸・映像作品として優れているのはもちろん、諸論点・課題を内包しつつも、「宗教2世」問題について学んだり、理解する際にも、非常に有効かつ意義ある作品だとまずは総括できる。

いわゆる「宗教2世」の信仰形成やそこにおける戸惑い、苦悩などについては、かなり共感的かつ詳細に描いていることが明らかになった。特に、宗教集団ならびに家族外の他者の視点が常にもち込まれることにより、信仰・信念の迷いやわからなさが描かれている点が特徴的であった。ただし、その「宗教」の描き方においては、いくぶん簡略化されたり、リアリティにおいて稀薄さも見られた点には注意が必要である。実際の「宗教2世」問題の状況とは、ズレる側面もあるということである。

また、小説版と映画版の差異に着目すると、映画版において設定やセリフを改変することで、教団内自己・家族と教団外他者との間の軋轢を先鋭化させているような局面も観察されることが明らかとなった。それはストーリー理解をわかりやすいシンプルなものにした面もあるが、他方でそれにより、この種の問題への向かい方やあり方の多様な可能性がいくぶん限定されている面も見られたと言えるだろう。

同じ「宗教2世」問題を扱った映画「カナリア」とも簡単に比較しておこう。そこには共通性と差異性が認められる。幼少期からしつけられた教えの内面化とその規定力の強さ、という面では共通しているだろう。そしてそれが、教団外他者との出会い(脱会した元「1世」信者らも含む)によって、揺さぶられ、悩みや葛藤につながるという構図も同様と言えよう。他方で、「星の子」は教団活動と家族信仰に支えられた「在家」における「宗教2世」の葛藤を抱えつつの「信仰持続」の様態を描いたものであるのに対して、「カナリア」は社会とは隔絶した「出家」教団における内部では家族とも離れ離れにされて信仰実践を行った「宗教2世」が教団を「脱会」するなかで自らの内面化された信仰と他者との関係に悩む様子を描いたものである点が、大きなちがいである。前者は「個人参加型」の教団、後者は「隔離型」の教団の場合と言ってもよい(島菌 2001)。この点は、「宗教2世」問題が、個々のパーソナリティや、家族・親子間の関係性や年齢などはもちろん、所属教団の教えや組織の構造、またそのなかにおける位置などによって大きくその表れが異なるということをあらためて示唆している。類型論的に整理して捉える必要もあろう。また、「星の子」におけるスピリチュアル・グループ的、ネットワーク、セミナー的な「宗教」の描き方は、この種の問題の所在を明確な「(新)宗教団体」に限るのではなく広く拡散しているものとして捉える必要性・方向性を示しているだろう。

最後に、本作の考察を通じて、いわゆる「宗教2世」問題のなかで、学校現場(友人関係、子ども—教員関係)の占める重みについても示すことができたことが確認できる。本作のような作品の理解を通じて、この問題の特性をつかむことに資するだろうし、その理解のためのポイントに敏感になっておく必要があるだろう。この点は、学校現場において信仰をもった児童・生徒たちにどう向き合うかという問題への対処法を示唆しており、学校教育現場や教員養成の場に応用可能性があるだろう。

本作で行ったような分析を媒介とすることで、これらの作品をより深く理解することもできようし、そこで描かれ

ている社会問題についての広く深い認識を醸成することにも資する有効性を示しえた。本分析を端緒とし、この問題への社会的な向き合い方を引き続き模索していきたい。

付記

本稿は、2021～2024年度科学研究費補助金（基盤研究C）「戦後日本の「宗教」教育をめぐる社会的議論と教育内容についての宗教－社会史的研究」（研究代表者：塚田穂高，研究課題番号：21K00068）の助成を受けた研究成果の一部である。

注

- 1) 本稿では同作の表題を、小説版は『』、映画版は「」，両者をまとめて指す際には「」で括って表す。また、同作の英文タイトルに定訳はないようだが、小説版は英語版Wikipedia (https://en.wikipedia.org/wiki/Natsuko_Imamura) などの諸表記を参照して「*Child of the Stars*」と、映画版は「日本映画データベース」サイト (<https://jfdb.jp/title/9229>) の表記に従い「*Under the Stars*」と記す。英文要旨における表記もこれに則っている。なお、本稿における各種サイトへの最終アクセス日時は、いずれも2021年11月22日である。
- 2) 筆者自身は、「宗教2世」の語の採用にはやや慎重かつ抑制的でありたいとも考えている。まず、語法的に「カテゴリー」＋「2世」（例：「政治2世」「経済2世」「教育2世」）はあまり用いられず、「人を表す名詞」＋「2世」（「日系移民2世」「2世議員」「2世芸能人」など）とする方が一般的だからである。また、「宗教2世」とすると、「特定宗教の信仰を持った家に生まれること」自体が問題であるかのように捉えられかねず、かつ必ずしも「宗教（団体）」に関するのではない同種の問題のケースが見過ごされる可能性があるからである。しかしそれでも、すでに近年において「宗教2世」の語がすでに一定程度流布しつつあり、しかもそれが主に当事者サイドからの問題告発的な切なる発信に基づいた動向である以上、注意を払いながらも用いていくという姿勢を取りたい。
- 3) 作者の今村夏子自身は、「宗教をテーマにしようとは最初は思っていませんでした。だいぶ前に、頭にペットボトルの水を掛け合う、高齢の男女のペアを目撃したんです。（中略）あれを物語にできないかなと考えているうちに、何かの儀式みたいだなと思えてきて、そこから宗教に結びつけていきました」（小川・今村 2019：247-248）と述べており、そもそも「宗教2世」を描こうとは思っていなかったようだ。しかし、だからといって、本作が多くの場合「宗教2世」を描いたものとして受容されている以上、こうした問題意識のもとに考察する意義は認められると考えられる。
- 4) 猪瀬による札幌創価学会の調査では、2002年の段階で「第二世代以降」が51.5%であった（猪瀬 2011：86）。その後もその割合は増加傾向であろう。創価学会のような布教伝道が活発な（であった）教団においてもこの割合であることを考えると、現代日本の宗教団体の自覚的信者としてはかなり多くの割合がすでに「2世信者」（以降）であると推測できるだろう。「宗教2世」問題の台頭・沸騰には、そのような教団的宗教をめぐる構造的変化が背景にあり、その様態の考察は現代世界と日本社会における「宗教」のあり方を問うことに直結する重要課題であるといっても過言ではない（塚田 2016ほか）。
- 5) 他には、キリスト教を対象とした映画を考察したものの蓄積が目立つ。（栗林・大宮・長石 2013）（木谷 2016）（服部 2019）などを参照。
- 6) 映画パンフレット（キネマ旬報社編 2020）、ならびに豪華版DVD同梱のブックレット、映画公式サイト (<https://hoshi-no-ko.jp/>) の内容も併せて参照している。また、『読売新聞』（東京版）2020年9月25日夕刊掲載の芦田愛菜インタビュー記事、『AERA』2020年10月12日号掲載の監督の大森立嗣と芦田の対談インタビュー記事、『ダ・ヴィンチ』2020年11月号掲載の芦田インタビュー記事などもそれぞれ参照した。
- 7) 以下、新宗教の特性について読み解く場合には、いずれも（井上・孝本・對馬・中牧・西山編 1990）（塚田 2012a）の記述などを参照している。
- 8) このラストシーンについてさらに付け加えるならば、小説版の最後は当初作者が考えたものから修整したものだという点がある。作者の今村は、「私が最初に考えたラストは、（教団のエリート）海路さんと昇子さんが草むらの陰にいて、もしかしたら、ちひろは取り込まれるのかもしれない、という予感を漂わせた終わり方でした」（小川・今村 2019：244）が、それだと「あまりにも悪意が見えすぎているという話になり」（同：242）、編集者と相談して修整したという。だが、こうした教団活動においては、幹部や上役に対して家族・親子関係について相談し、指導をおおぐことは一般的であるし、教団役職者が次世代の信者教化やリーダー育成のために「取り込もう」と目を配ることもあるだろう。「信仰」する「家族」の陰で実は教団幹部が目を見らしていた（教団的統制が示唆されていた）というのは、案外「宗教2世」問題の構造を实によく捉えた場面設定だったのかもしれない。もっとも今村自身は、そのラストの変更ならびにそれが読者に感動をもって受け入れられたことを「良かった」（同：243）としているし、映画版での姉まーちゃんからの連絡があったとするラストシーンの変更も「嬉しいこと」「原作には描かれていない、その先の未来を予感させてくれた」（『ダ・ヴィンチ』2020年11月号：167）と好意的に評価しているようではある。
- 9) 監督の大森は、「（特定宗教の信仰という）そうした部分を映画で強調しすぎると、「この子はいじめられているので

はないか」と感じてしまうので、なるべく抑制しなければと思っていました」（『AERA』2020年10月12日号：34）と述べる。映画版での数々の変更点は逆に隔絶性を強調させる面があったが、友人関係という面では特にフラットさが意識されていたことが看取できる。ただし、現実には同調圧力が強い学校という場において、特定の信仰をもった児童・学生がどう扱われ、どう過ごすかという点には注意が必要だろう。

引用文献・資料

- 藤井健志 1990 「小説の中の新宗教」井上順孝・孝本貢・對馬路人・中牧弘允・西山茂編『新宗教事典』弘文堂、549-554。
- 藤倉善郎 2021 「NHKの特集連発で揺れる「カルト2世問題」の行方—団体側の構造を無視し「親子問題」に矮小化してはならない—」（「論座」2021/6/22, <https://webronza.asahi.com/national/articles/2021061500002.html>）。
- 藤田庄市 2021 「リアルな「宗教二世」物語『星の子』を読む、観る」『週刊仏教タイムス』2882（2021年1月21日）号：2。
- 服部弘一郎 2019 『銀幕の中のキリスト教』キリスト新聞社。
- 今村夏子 2017 『星の子』朝日新聞出版。
- 井上順孝 2014 「宗教文化教育の教材としての映画」『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』7：26-57。
- 井上順孝 2015 「宗教文化教育の素材としての日本映画」『國學院大學研究開発推進機構紀要』7：1-36。
- 井上順孝 2020 「映像に投射された宗教文化」『グローバル化時代の宗教文化教育』弘文堂、75-136。
- 井上順孝編 2009 『映画で学ぶ現代宗教』弘文堂。
- 井上順孝・孝本貢・對馬路人・中牧弘允・西山茂編 1990 『新宗教事典』弘文堂。
- 猪瀬優理 2002 「脱会プロセスとその後—ものみの塔聖書冊子協会の脱会者を事例に—」『宗教と社会』8：19-37。
- 猪瀬優理 2004 「信仰継承に影響を与える要因—北海道創価学会の調査票調査から—」『現代社会学研究』17：21-38。
- 猪瀬優理 2011 『信仰はどのように継承されるか—創価学会にみる次世代育成—』北海道大学出版会。
- キネマ旬報社編 2020 『星の子』（映画パンフレット）東京テアトル株式会社。
- 木谷佳楠 2016 『アメリカ映画とキリスト教—120年の関係史—』キリスト新聞社。
- 栗林輝夫・大宮有博・長石美和 2013 『シネマで読むアメリカの歴史と宗教』キリスト新聞社。
- 小川洋子・今村夏子 2019 「対談 書くことがない、けれど書く」今村夏子『星の子』朝日文庫、228-255。
- 大森立嗣監督 2021 「星の子」（DVD）ハピネット。
- 櫻井義秀・中西尋子 2010 『統一教会—日本宣教の戦略と韓日祝福—』北海道大学出版会。
- 島蘭進 2001 『ポストモダンの新宗教—現代日本の精神状況の底流—』東京堂出版。
- 谷富夫 1993 「新宗教青年層における呪術性と共同性—崇教真光を事例として—」『アカデミア（人文・社会科学編）』57：149-271。
- 塚田穂高 2006 「『2世信者』の信仰形成の過程と教団外他者」川又俊則・寺田喜朗・武井順介編著『ライフヒストリーの宗教社会学—紡がれる信仰と人生—』ハーベスト社、82-104。
- 塚田穂高 2009 「カナリア」井上順孝編『映画で学ぶ現代宗教』弘文堂、34-35。
- 塚田穂高 2012a 「新宗教の展開と現状」高橋典史・塚田穂高・岡本亮輔編著『宗教と社会のフロンティア—宗教社会学からみる現代日本—』勁草書房、23-43。
- 塚田穂高 2012b 「社会問題化する宗教—「カルト問題」の諸相—」高橋典史・塚田穂高・岡本亮輔編著『宗教と社会のフロンティア—宗教社会学からみる現代日本—』勁草書房、45-65。
- 塚田穂高 2016 「日本の〈新宗教運動=文化〉研究の課題と展望」『國學院大學研究開発推進機構紀要』8：1-35。
- 塚田穂高 2020 「学校の中の「宗教」—宗教研究と中高等教育の連携接合を目指して—」『上越社会研究』35：5-24。
- 塚田穂高 2021 「「宗教2世」問題 信者だけの話ではない」『朝日新聞』2021年7月14日夕刊：2。
- 塚田穂高 2022 「「宗教2世」問題の沸騰は何を問いかけるか」自由国民社編『現代用語の基礎知識2022』自由国民社、278。
- 渡辺雅子 1990 「入信の動機と過程」井上順孝・孝本貢・對馬路人・中牧弘允・西山茂編『新宗教事典』弘文堂、202-209。
- 渡辺雅子 2003 「新宗教における世代間信仰継承—妙智會教団山形教会の事例—」『明治学院大学社会学部附属研究所年報』33：121-135。
- 渡辺雅子・井桁碧 1989a 「新宗教における病気治療—教祖のカリスマと「聖なる水」—（上）」『明治学院論叢 社会学・社会福祉学研究』81：79-95。
- 渡辺雅子・井桁碧 1989b 「新宗教における病気治療—教祖のカリスマと「聖なる水」—（下）」『明治学院論叢 社会学・社会福祉学研究』82：39-106。
- 2020 「「星の子」思春期の心の揺れ 演じる 芦田愛菜 「信じる」って 自分を持つこと」『読売新聞』（東京版）2020年9月25日夕刊：6。
- 2020 「芦田愛菜×大森立嗣 映画「星の子」を語る お互いを信じ合う現場でした」『AERA』2020年10月12日号：34-35。
- 2020 「少女が向き合う「信じる心」映画『星の子』公開（寄稿 小説の先の未来を予感させてくれた 今村夏子／『星の子』主演インタビュー 芦田愛菜 撮影が進むほど“私”の部分がどんどん少なくなって、ちひろに似ていった）」『ダ・ヴィンチ』2020年11月号：166-169。

Religion, family, and school as represented by the novel and film *Hoshi no Ko (Child of the Stars, Under the Stars)* : Considering the problem of “second-generation believers”

Hotaka TSUKADA *

ABSTRACT

This paper utilizes Natsuko Imamura’s novel *Child of the Stars (Hoshi no Ko)* (2017) and its film adaptation *Under the Stars* (2020) as a case study to examine contemporary issues related to religion, family, and school, especially issues pertaining to the so-called “second-generation believers (*Shūkyō Nisei*, or *Nisei Shinja*).”

The “second-generation believers,” representing children who grew up under the influence of the teachings of their parents and family members professing a particular faith or belief and their religious group, is gaining attention in contemporary Japanese society. Many such individuals are beginning to speak out about their problems, suffering, and existential difficulties through various media such as comics and books, as well as through social networking services.

The novel and film *Hoshi no Ko* centers on a young girl who grows up troubled as her parents are devoted to a so-called “new religion.” I analyzed and discussed the three-way relationship between religion, family, and school, conscious that such a work may contain many perspectives on the social issues of our times and thus attending specifically to the differences between the novel and its film version.

The analysis initially revealed that this work sympathetically portrays the formation of faith in the second-generation believers, as well as their confusion and anguish. Characteristically, this work always introduces the perspectives of others outside the religious group and the family to depict hesitation and uncertainty about faith and belief. In particular, the space of the school and the behaviors of teachers inject an external critical perspective, so it suggests the problems of how students of faith can be handled in the school setting. The differences between the novel and the film also revealed that the movie version sharpened the friction between the believing self and unbelieving others by altering settings and dialogs.